

100 YEARS OF
民藝の100年

柳宗悦没後60年記念展
民藝の100年

100 Years of Mingei:
The Folk Crafts Movement



2021
10.26 TUE
2022
2.13 SUN

MMAT

東京国立近代美術館
The National Museum of Modern Art, Tokyo

ローカルであり、モダンである。

ローカルであり、モダンである。

今、なぜ「民藝」に注目が集まっているのでしょうか。「暮らし」を豊かにデザインすることに人々の関心が向かっているからなのか。それとも、日本にまだ残されている地方色や伝統的な手仕事に対する興味からなのか。いずれにせよ、およそ100年も前に柳宗悦、濱田庄司、河井寛次郎が作り出した新しい美の概念が、今なお人々を触発し続けているのは驚くべきことです。「民藝」という言葉が生まれたのは1925年12月末のこと。民藝の思想の種がまかれてから、およそ100年（正確にいうと「民藝」誕生から96年）。柳宗悦の没後60年に開催される本展では、時代とともに変化した民藝の試みを俯瞰的な視点からとらえなおします。

「民藝」とは、「民衆的工芸」を略した言葉です。民藝運動が生まれたのは、近代の眼がローカルなものを発見していくという「捻じれ」をはらんだ時代です。柳らは、若くして西洋の情報に触れ、モダンに目覚めた世代でありながら、それまで見過ごされてきた日常の生活道具の中に潜む美を見出し、工芸を通して生活と社会を美的に変革しようと試みました。

本展は、柳らが蒐集した陶磁器、染織、木工、蓑、籠、ざるなどの暮らしの道具類や大津絵といった民画のコレクションとともに出版物、写真、映像などの同時代資料を展示し、総点数400点を超える作品と資料を通して、民藝とその内外に広がる社会、歴史や経済を浮かび上がらせます。

今回とりわけ注目するのは、「美術館」「出版」「流通」という三本柱を掲げた民藝のモダンな「編集」手法と、それぞれの地方の人・モノ・情報をつないで協働した民藝のローカルなネットワークです。民藝の実践は、美しい「モノ」の蒐集にとどまらず、新作民藝の生産から流通までの仕組み作り、あるいは農村地方の生活改善といった社会の問題提起、衣食住の提案、景観保存にまで広がりました。「近代」の終焉が語られて久しい今、持続可能な社会や暮らしとはどのようなものか—「既にある地域資源」を発見し、人・モノ・情報の関係を編みなおしてきた民藝運動の可能性を「近代美術館」という場から見つめなおします。

なぜ今、「東京」「国立」「近代」「美術」館で民藝の展覧会？

“第一に、近代美術館は官設であるが、民藝館は私設である。つまり「官」と「野」の違いである。”

“近代美術館は「現代の眼」^{ひょうぼう}を標榜してゐる。併し民藝館は「日本の眼」^{しか}に立たうとする。”

“近代美術館は、その名称が標榜してゐる如く、「近代」に主眼が置かれる。民藝館の方は、展示する品物に、別に「近代」を標榜しない。”

“近代美術館が今迄取り扱った材料を見ると、大部分が所謂「美術」^{いわゆる}であって、「工芸」の部門とは縁がまだ薄い。”

柳宗悦「近代美術館と民藝館」『民藝』第64号
(1958年4月1日発行)

当館は、開館(1952年)まもない頃、晩年の柳宗悦からこのような「批判文」を投げかけられています。

たしかに当館の名称はすべて柳が対抗しようとしたものばかり。(「東京⇄地方」／「官⇄民」／「近代⇄前近代」／「美術⇄工芸」)

われわれ東京国立近代美術館も、まもなく開館70年。民藝運動と同様に、時代とともに変化してきました。

本展は63年前、柳から投げかけられた辛辣な「お叱り」を今、どのように返球するのか、というチャレンジでもあります。

「近代」という時代と「美術」という領域を扱う当館の展示空間と民藝の間にいったいどんな化学変化が生まれるでしょうか。

Takashi Sugiyama

日本民藝館学芸部長・杉山享司氏より応援メッセージ

「西洋の眼」ではなく、なぜ「日本の眼」を標榜しないのかと、かつて柳宗悦は東京国立近代美術館に苦言を呈した。借りものではない、自らの眼で美を見出すことの大事さを訴えたのだ。時代は巡り、まさかそこで自身の記念展が開かれるとは、夢想だにできなかったであろう。本展では、柳の美思想やその広範な実践活動が、自身の蒐集品を通してどのように紹介されるのか注目される。きっと柳も苦笑しつつ、彼方の空から眺めているに違いない。



杉山享司
日本民藝館学芸部長

民藝の樹

民藝運動の三つの柱とローカル・ネットワーク

全国を歩き、蒐集し、文章を書き、ものを作る—民藝運動を推進したのは、さまざまな職能と地縁をもつ人々のつながりでした。今回とりわけ注目するのは、「美術館」「出版」「流通」という三本柱を掲げた民藝のモダンな「編集」手法と、それぞれの地方の人・モノ・情報をつないで協働した民藝のローカルなネットワークです。古民藝の調査・蒐集・展示、雑誌の出版、新作民藝の製作からショップ経営まで、それぞれの地域に根ざした人々との協働に注目します。

生産と流通

たくみ工芸店

各地の新作民藝を販売するセレクトショップ



銀座たくみ(内観) ※2



耳鼻科医
吉田 璋也
(1898-1972)

鳥取市出身。鳥取市と東京・西銀座に「たくみ工芸店」、戦後、鳥取市にしゃぶしゃぶ料理店「たくみ割烹店」を開店。鳥取を拠点に陶器や家具の新作民藝のプロデュースを手がけた。

写真提供 ※1日本民藝館 ※2鳥取民藝美術館

ミュージアム

日本民藝館

古今東西の民藝品を調査・蒐集・展示。



完成もない日本民藝館 1936年 ※1



『月刊民藝』第1巻第5号 1939年8月号



宗教哲学者
柳宗悦
(1889-1961)

東京生まれ。民藝運動の指導者として主に東京・駒場を拠点に活動。



陶芸家
濱田庄司
(1894-1978)

神奈川県川崎市出身。栃木県益子を拠点に活動。



陶芸家
河井寛次郎
(1890-1966)

島根県安来町出身。京都市五条坂を拠点に活動。



陶芸家
バーナード・リーチ
(1887-1979)

イギリス出身、香港生まれ。1909年来日し、柳らと交流。



染織家
芹沢銈介
(1895-1984)

静岡市出身。主に東京・静岡を拠点に活動。

出版

日本民藝協会

雑誌『工芸』『月刊民藝』などの機関誌を発行。

そのほか工芸に関する書籍の刊行。



精神科医
式場隆三郎
(1898-1965)

新潟県中蒲原郡出身。民藝の機関誌の編集や数多くの文筆・出版を手がけた。

本展の見どころ

1 民藝の歴史的な変化と社会の関係をたどります。

民藝運動はどのような背景のなかで生まれ、変化してきたのでしょうか。関東大震災、鉄道網の発達と観光ブーム、戦争と国家、戦後の高度経済成長—民藝運動の歩みは「近代化」と表裏一体であり、社会の大きな節目と併走するように展開してきました。なぜ今、民藝が注目されるのかをひも解きます。

2 手を動かす柳宗悦—そのデザイン・編集手法を分析します。

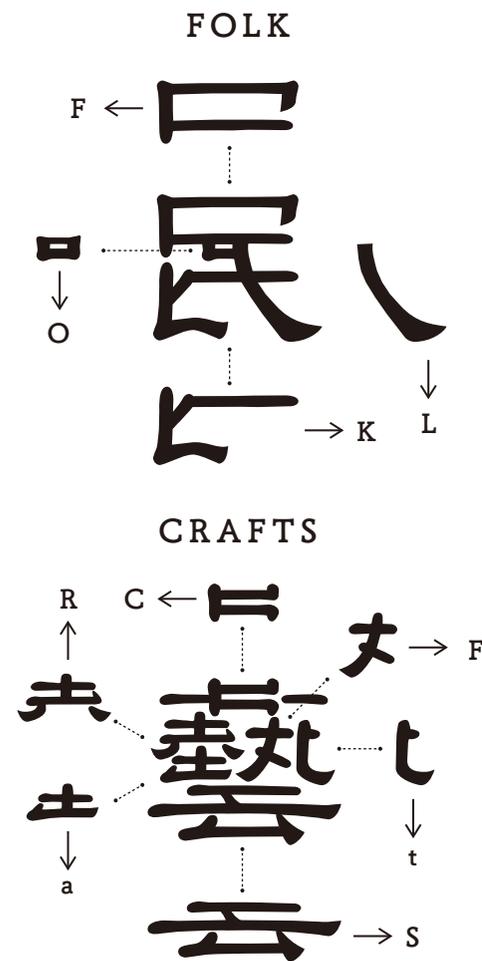
宗教哲学者であり、文筆活動を主体として民藝運動を推しすすめた柳ですが、実はなかなかの画力の持ち主。集めた器物をスケッチし、書体(フォント)を作り、写真のトリミングや配置を決め、あるいは建物や製品の設計図を描き、大津絵などの絵画の表具をしつらえるなど、あらゆる「編集」作業に腕をふるいました。柳がさまざまなメディアを通して、自らの美的感覚をどのように示し、伝えたのか—その「手さばき」を解析します。

3 衣食住から景観保存まで

ツイードの三つ揃いスーツ、蝶ネクタイに丸眼鏡、ワークウェアとしての作務衣—民藝の人々はみなスタイリッシュでお洒落でした。しゃぶしゃぶにカレー、地方のお土産菓子など、食文化にも民藝は関わっています。民家の特徴を取り入れた建築にウィンザーチェア、日本・朝鮮・西洋折衷のインテリアデザインは良く知られるところですが、鳥取砂丘の景観保存にも民藝が関わっていたこと、ご存じでしたか？

本展の「民藝」ロゴについて

本展のために制作したオリジナルロゴは、アルファベットの「FOLK CRAFTS」で構成しました。民藝が国際的な視野を持っていたように、漢字と英字を結びつけました。



1章

「民藝」前夜—あつめる、つなぐ

1910年代~1920年代初頭

柳宗悦が結婚後に居を構えた自然豊かな我孫子(千葉県)という場所は、『白樺』同人の志賀直哉、武者小路実篤が移り住み、生涯の友人となるバーナード・リーチも窯を築くなど、柳自身が「コロニー」と呼ぶ親密な芸術家村をはぐくんで、のちの民藝運動の揺籃の地となりました。『白樺』誌上での美術紹介、蒐集のはじまりと美術館建設の夢、それが縁となる友人との出会いと交流。人とモノが集まる「場」をつくることから民藝運動は始動しました。

プレゼント From ロダン。 本物のロダン彫刻がやってきた!

世界とつながりたい『白樺』同人は、ロダンと書簡で交流を試みます。すると、1911年末にロダンから三体の彫刻が届き、同人たちは興奮に包まれました。

オーギュスト・ロダン《ある小さき影》1885年
大原美術館(白樺美術館より永久寄託)



『白樺』第1巻第8号 ロダン特集号

1910年に創刊した『白樺』は、フォーゲラー、ゴッホ、セザンヌ、ロダンなどの西洋近代美術を積極的に紹介。柳宗悦はこの『白樺』で雑誌の編集技術を培いました。

『白樺』第1巻第8号「ロダン」特集 1910年11月号 日本民藝館



インテリアは、古今東西の美術品が満載

バーナード・リーチが描いた、我孫子の柳宗悦邸の書斎。柳の背後の棚には、洋の東西のコレクションが並び、そこにロダンの《ある小さき影》も居場所を得ています。



バーナード・リーチ《書斎の柳宗悦 我孫子》1918年 日本民藝館
© The Bernard Leach Family, DACS & JASPAR 2021 E4207

ロダンが見たい! 運命を変えたお土産

彫刻家を志していた浅川伯教が、ロダンの彫刻を見るために柳邸を訪ねた際、土産に持参したのがこの朝鮮の壺でした。柳が陶磁器の美に開眼する契機となった品。

《染付秋草文面取壺》(瓢形瓶部分) 朝鮮半島 18世紀前半 日本民藝館



イギリスのスリップウェアにみんな夢中

柳によれば、1913年に丸善で見つけた英国の伝統的な陶器の専門書がきっかけとなって、柳や富本憲吉、濱田庄司らの間にスリップウェア熱が高まったといいます。リーチは日本でスリップウェアを知り、楽焼の技法で写しを試みました。

バーナード・リーチ《楽焼筒描ペリカン文皿》1913年 日本民藝館
© The Bernard Leach Family, DACS & JASPAR 2021 E4207



2章 移動する身体—「民藝」の発見

1910年代後半～1920年代

民藝運動を推進する力は「旅」にありました。大正から昭和初期にかけて、鉄道を中心とする交通網の発達とともに旅行ブームが起こりますが、柳宗悦、濱田庄司、河井寛次郎ら創設メンバーは、国内外を精力的に移動し、各地の民藝を発掘・蒐集していきます。柳の場合、朝鮮の文化との運命的な出会いがあり、その後に木喰仏と江戸期の民藝の調査が続きました。関東大震災の後、柳が京都に転居した時期とも重なり、まさに彼自身が「移動」することから「民藝」の発見の旅は始まりました。彼らの関心はヨーロッパの工芸運動にも向いていました。グローバルな工芸とモダン・デザインの潮流を参照しながら、日本の各地に眠る民藝を発見していく過程を、彼らの旅の軌跡とともに示します。

朝鮮の友へ。 ミュージアム構想のはじまり

1920年に朝鮮を旅行した際、柳は浅川巧の家で朝鮮陶磁に深く感動し、朝鮮民族美術館設立を構想しました。数年かけて彼らは資金を集め、工芸品を蒐集。1924年、その夢はソウルの景福宮内に実現します。これらはその朝鮮民族美術館のために蒐集された水滴と膳。朝鮮の人々の生活に根ざした美術館を目指し、「生活の道具であったものは何でも集めた」といいます。

上／《紙綴り文八角膳》朝鮮半島 19世紀 日本民藝館
下／《染付辰砂鯉形水滴》朝鮮半島 19世紀後半 日本民藝館



旅のきっかけは、木喰仏

1924年、朝鮮陶磁器を見るために、友人の浅川巧とともに訪れた山梨県甲府の旧家で、柳は木喰上人が彫った仏像に偶然出会います。その後数年間、柳は日本国中を巡り、木喰仏についての調査研究を行いました。

左／木喰五行《地藏菩薩像》1801年 日本民藝館
右／新潟・南魚沼郡調査の折 如意輪観音菩薩像と 大月観音堂にて 1925年8月23日撮影 ※1



京都の弘法市で見つけた、 渋い縞の丹波布

関東大震災で京都に転居した柳は、朝市で探し求めている布に出会います。兵庫の丹波布は、主に京阪で丁稚の布団などに使われていたという、ざっくりとした風合いの草木染の格子柄の布。柳は丹波布を大津絵などの表具裂として好んで使いました。

《丹波布夜具地》(部分) 江戸～明治時代 19世紀 日本民藝館 (半期展示)



ヨーロッパ、アメリカへ。 発見と蒐集の旅

クリーム状の化粧土(スリップ)で模様を描き、琥珀色のガレナ釉を掛けた英国スリップウェア。ハーバード大学に招かれ、渡航の途上、柳はこの大鉢を1929年にロンドンの骨董屋で入手。アメリカに渡った時も座右の品として携行しました。

左／《スリップウェア皿》イギリス 18世紀後半～19世紀前半 日本民藝館
右／スリップウェア皿を持つ柳宗悦 1930年 ※1



椅子の文化を日本に。 腕利きのバイヤーでもありました。

1929年、柳は濱田とともに欧米旅行に出発。イギリスで大量のウィンザーチェアを買い付け、日本に送ります。これらは同年銀座の鳩居堂で展示・販売されました。柳は、朝鮮と英国の家具を高く評価していました。

《ボウバック・アームチェア スプラットタイプ》イギリス 19世紀 日本民藝館



3章

「民」なる趣味—都市／郷土

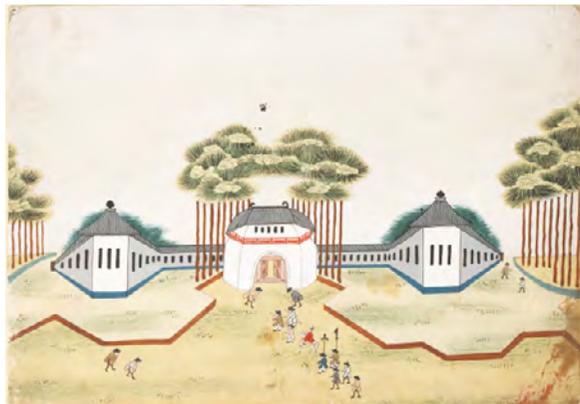
1920年代～1930年代

初期民藝運動の周囲には、相互に関連しあう異なる趣味の世界が林立していました。日本の近代化の矛盾が露呈してきた大正末から昭和の初期にかけて、「都市」に対する「郷土」という概念の成立とともに、「民俗」「民家」「民具」「民芸」など地方の伝統的な生活文化を再評価する動きが、都市生活者の趣味という側面を含んで活発化します。民藝運動は、「上加茂民藝協團」を結成し、ギルド(制作者集団)による新作民芸の創造と生活の芸術化という理想を追い求めていきました。

日本にもアンリ・ルソーがいるじゃないか。

『雑器の美』(1927年)の中で、柳は「大津絵」「絵馬」「泥絵」など、土産物や奉納品として大量につくられた絵を「民画」と名づけました。西洋由来の遠近法をぎこちなく取り入れたのが「泥絵」の特徴ですが、本作品の素朴な味わいを柳はアンリ・ルソーになぞらえています。

《泥絵 異国風景図》江戸時代 18世紀後半 日本民藝館(半期展示)



ノスタルジックな玩具

杉山寿栄男『三春人形 趣味の図集』(1925年)が刊行されたことが示すとおり、大正から昭和にかけて、郷土玩具の趣味の世界で、福島県の三春人形に注目が集まりました。柳もその造形に魅了され、民藝館のコレクションに加えています。

《三春人形 橋弁慶》江戸時代 19世紀前半 日本民藝館

用途を変更しても、
圧倒的な存在感です。

民家の炉端に不可欠な自在掛。煙で燻され、磨き込まれて深まった色合いや、縄の擦れは使い込まれた証。民家・民具の発見は、近代化で農村からこうした道具が失われていくのと同じくしていました。前近代の暮らしの道具を美的に見る民藝のまなざしは、実は近代化と表裏一体のものでした。

《大黒形自在掛》北陸地方 江戸時代 19世紀 日本民藝館

発掘ブームは、●●焼から。
(産地が肝心です)

窯場の産地名を冠して●●焼。美濃(岐阜)は発掘ブームの震源地の一つでした。「どこで焼かれたものか」を発掘という当時の「科学」から類推する陶磁器蒐集の「趣味」が流行し、各地にコレクターが生まれました。こうした「趣味」の発生も民藝運動のはじまりと重なっています。

《鉄絵線差草文皿》美濃・笠原 江戸時代 17世紀 日本民藝館



蒐集から制作へ。新しい民藝をつくる。

1927年、柳を指導者として木工の黒田辰秋、染織の青田五良、鈴木実、金工の青田七良らが京都で上加茂民藝協團を結成。本作は柳の家から借りて帰った朝鮮の筆筒を手本に制作されたもの。古民藝の蒐集から新作民藝の制作へ、民藝運動は活動を広げていきました。

黒田辰秋《拭漆櫻真鍮金具三段棚》1927年 河井寛次郎記念館



4章 民藝は「編集」する

1930年代~1940年代

柳宗悦は、美の本質に迫るためには、思想や嗜好や慣習を介在させずに「直下^{じか}に」物を観ることが大切であると説きました。しかし、その一方で、柳は、雑誌の挿絵の機能や、作品図版のトリミングの効果、さらには展覧会における陳列の方法など、メディアを駆使して物の見方を示す、優れた「編集者」でもありました。この章では、民藝運動が雑誌や美術館を介して提示した「美の標準」の分析を通して、「柳の眼」を具体的に読み解いていきます。「民藝の樹」に図示されるように出版、美術館、ショップという三本柱をいかに活用したかという観点から、民藝運動のメディア戦略を考察します。

雑誌『工藝』創刊。 書物そのものが工芸品

1931年、民藝運動の機関誌として創刊された雑誌『工藝』。豊富な写真図版と原稿によって民藝の美や思想を紹介。表紙は織物や漆絵、用紙には各地の手漉和紙が用いられ、装幀や小間絵は芹沢銈介や河井寛次郎など民藝の同人が担当。紙や布の特集では、実物が貼り込まれている号もあります。

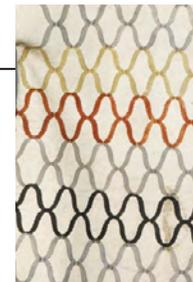
雑誌『工藝』第1号-第3号 1931年（型染・装幀 芹沢銈介）日本民藝館



一番良きところを抽出して、トリミングする。

武家の革羽織。背中と両袖部分には家紋があり、金と赤の丸紋のアププリケが施されていますが、柳はこれを図版にすると、この網目紋のみクローズアップして部分図として掲載。柳の眼が何を美しいと感じ、いかに切り取って提示してみせたのかがよく分かる一例。

《白地網文様鞆散し革羽織》(部分) 江戸時代 18世紀 日本民藝館



民窯のうつわをリニューアル

医師の吉田璋也は、1930年に郷里の鳥取に帰郷し、新作民藝の制作を開始。江戸末期から続く牛ノ戸窯で現代の生活にふさわしい日常の食器の生産を試みました。元々は伊羅保釉（褐色）と黒釉の掛け分けだったものを銅緑釉と黒釉にアレンジ。柳も大絶賛した一品。

《緑黒釉掛分皿》鳥取県・牛ノ戸 1930年代 日本民藝館



屑繭が紳士の お洒落アイテムに変身

吉田璋也は柳から送られた英国のホームスパンの毛糸のネクタイを手本に、ニングリ糸（屑繭で紡いだ糸）を用いて新しいデザインを考案。農家の女性の副業として生産しました。吉田が開店した「たくみ工藝店」の人気商品で、類似品が出回るほどでした。

《にくりネクタイ》鳥取県 1931年デザイン 鳥取民藝美術館
撮影：白岡晃



民藝の人々はみな、お洒落。

柳ら民藝の人々のファッションにも注目。柳はスコットランド・アイルランド原産の手紡ぎ・手織りの毛織物、ホームスパンを好んで着用しました。柳からホームスパンを見せられた及川全三は、郷里の岩手で草木染のホームスパンの生産に取り組むようになります。写真は及川制作のジャケットを着る柳。

ホームスパンを着用する柳宗悦 日本民藝館にて 1948年 ※1

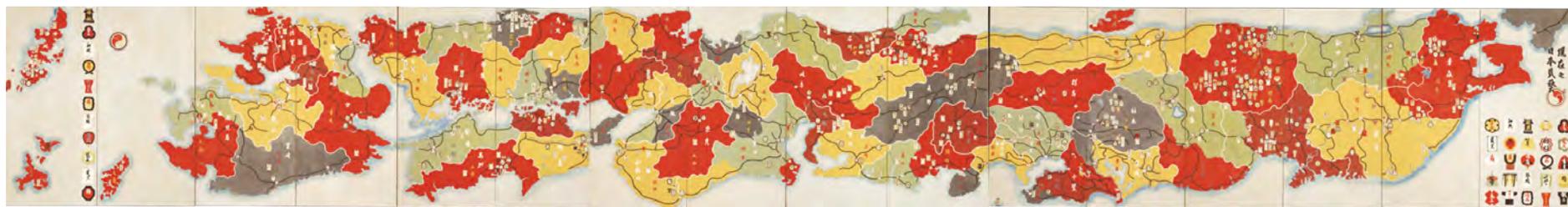


5章

ローカル／ナショナル／インターナショナル

1930年代～1940年代

江戸時代を中心にした「古作」の民藝品の蒐集からはじまった民藝運動は、1930年代から1940年代にかけて、地方において今なお流通している「現行品」の調査に精力を傾け、現代における手仕事の保存と育成と産業化という目標に向かって活動を展開します。1941年の「日本現在民藝品展」の際に柳宗悦が芹沢銈介に制作を依頼した《日本民藝地図(現在之日本民藝)》は、彼らの全国調査の成果を表現したのですが、各地の多様な民藝をひとつの日本に束ねる民藝運動の実践は、戦時下の国内外において、日本文化を表象する役割を担うようになります。戦時の社会的・文化的な背景を踏まえて、この時期の民藝運動が遺したものを再考します。



芹沢銈介《日本民藝地図(現在之日本民藝)》1941年 日本民藝館

民藝を地図化する。

六曲一双と四曲一隻からなる全長13メートルを超える日本地図に、民藝運動が各地で見出した工芸品の産地が記録されています。旧国名と、現在の都府県の境が重ねられていること、北海道が描かれていないことに、民藝同人の地理観、歴史観がうかがえます。

機能もかたちもいい。

舟に溜まった水をくみ出すための道具、垢取。松材を削り抜いたもので、沖縄の削り舟・サバニの舟底の形に合わせ、底に丸みをもたせて作られています。柳はこれを宝物のように持ち帰りました。『月刊民藝』創刊号の表紙となった一品。

《垢取り》沖縄県・糸満 1939年頃 日本民藝館



量産の手わざから生まれるもの

栃木県・益子の日用雑器、山水土瓶。皆川マスという絵付の達人は1日に500～1000個も描いたといえます。その見事な筆づかいは、日本文化の国際発信のために制作された記録映画「日本の陶磁器」におさめられています。

《山水土瓶》栃木県・益子 1940年頃 日本民藝館



アイヌと内地の交流史を物語る衣装

日本民藝館では、1941年に「アイヌ工芸文化展」が開催され、『工藝』106号、107号でアイヌ特集を組みました。アイヌの衣装には、内地との交易の跡を残すものがありますが、本作も和人から入手した木綿の古着を、切伏(アップリケ)を付して、アイヌ様式に仕立て直したものです。

《木綿切伏衣裳》北海道アイヌ 19世紀 日本民藝館(半期展示)



雪国の人々の生活向上に。

戦時中、日本民藝協会は東北の民藝品調査と制作指導にも携わりました。積雪期の副業振興は、東北農村の経済的救済をはかるものでした。柳らは藁や笠、藁沓などの編組品をはじめ、自給自足できる素材を用いた雪国の手仕事の美しさを評価。東京で開催された東北民藝品展で上位入選したものは、たくみ工芸店が買い取りました。

《藁沓》山形県 1940年頃 日本民藝館



6章 戦後をデザインする —衣食住から景観保存まで 1950年代～1970年代

日本が敗戦から国際社会に復帰する過程で、民藝は再び国際文化交流の最前線に立つこととなります。柳宗悦と濱田庄司は、二度目の欧米滞在中、民藝運動の新たな可能性のひとつとしてモダン・デザインに注目しましたし、デザイン界も民藝への関心を高めていきます。1958年の「フィンランド・デンマークのデザイン」展や、1950年代の柳宗悦の長男・宗理による日本の民窯との一連のコラボレーションによって、民藝からインダストリアル・デザインに展開する道筋が示されました。戦後の経済成長に伴う民藝ブーム、ライフスタイルの変化に合わせて衣食住をトータルに提案していくような民藝運動の拡張の動きもあり、それらは民家保存や景観保存といった領域にまで及びました。

民藝と北欧デザインの接点

上／1956年、スウェーデンの陶磁器デザイナー、ヴィルヘルム・コーゲはYMCA日本観光団の一員として来日した際、益子の濱田庄司の窯や日本民藝館を訪れます。写真は、現在、日本民藝館に7点所蔵されているコーゲ作品のひとつ。コーゲは濱田や河井の作品の他、日本の民藝品に関心を示し、土産に持ち帰っています。下／1958年、白木屋で開催された「フィンランド・デンマークのデザイン」展は、柳宗理による監修。前書きには柳宗悦も文章を寄せています。

上／ヴィルヘルム・コーゲ《澱青釉碗》スウェーデン 1950年代 日本民藝館
下／展覧会カタログ『フィンランド・デンマークのデザイン』日本民藝協会 1958年 東京国立近代美術館



モダンであり、ローカルである。

愛煙家であった河井寛次郎がデザインした真鍮製のキセル。寛次郎の郷里である島根県安来市の金工職人・金田勝造が制作したもので、詳細な指示書が残されています。およそ10年にわたって様々な種類が制作されました。

河井寛次郎デザイン 金田勝造制作《キセル》1950-60年代 河井寛次郎記念館



民藝×インダストリアル・デザイン 河井寛次郎と柳宗理

柳宗悦の長男である宗理が原型をデザインし、京都五条坂の河井寛次郎の窯で焼かれた黒土瓶。同じ規格の製品が作りやすい型成形によるものですが、ゆず肌の黒い釉薬の風合いに宗理は注目しました。手と機械、工芸品と工業製品をつなぐ試み。

柳宗理デザイン《黒土瓶》京都五条坂窯 1958年
柳工業デザイン研究会（金沢美術工芸大学寄託）



戦後の暮らしにフィットした生活雑誌



雑誌『民芸手帖』東京民芸協会 1958年創刊 東京国立近代美術館

衣食住への幅広い関心を、生活者の目線で拾い集める雑誌『民芸手帖』が1958年6月創刊。編集人は浜松の民藝運動を支えた中村精。

あなたにとっての民藝とは？

本展開催によせて、メッセージをいただきました。

Akito Akagi



赤木明登

塗師

倉敷民藝館の近くで育ち、民藝はいつも身近にあった。子どもの頃は意味もわからず収集品の雰囲気気に親しんでいた。大人になって柳の本を読み、民藝のことが一度わからなくなった。「用と美」が、なぜ結びつくのかわからないのだった。それから柳の文章を読み込んで、ある結論に辿りつく。民藝は、いま私たちが現実生きている世界、所謂「現生」の外部に、美の根拠となる「浄土」を設定する。現生と浄土の往還によって美はもたらされるのだ。この超越性を理解しなければ、柳民藝はわからない。このアイデアそのものが、近代化によって疎外されたものなのだが、工藝の原点には、いまだその超越的な理念が息づいていることをぼくは知っている。

本展の展示デザインをしています。



©Maetani Kai

西澤徹夫

建築家

民藝運動は、民衆の芸術を一望したいという欲望、すべての人間の営みを総覧したいという壮大な野望にも思えます。しかし論理的にはそれらの蒐集には際限がないから、むしろ個々の品物に内在する価値を越えて、圧倒的で不確かな全体像を民藝

Tezozo Nishizawa

の名においてまるまるつくりあげた、ということが、そして今に至るまでさまざまな品物が一覧の中に加え続けられているということが、この概念の強度だと思います。だから民藝運動がそれまでまったくなかった「美しさ」を発見したこと、またその広げられた価値観のなかにいまだ僕たちの創作や生活が含まれてしまっている、あるいはそれが今や当たり前の世界になっているということに、あらためて驚嘆するばかりです。



Yoshiharu Doi

土井善晴

料理研究家

料理人を目指していた私が家庭料理の先生の道を余儀なくされたとき、身を落とした、と、感じたことは単なる未熟でした。思い悩む私は河井寛次郎記念館で人間の暮らしと

一致する仕事から生まれた民藝美を観て、「家庭料理は民藝だ」って発見したのです。それからずっと家庭料理を民藝と重ねて考えてきました。そこには、ひたむきな、つつましい、自由な、元気な、希望の世界がありました。家庭料理と民藝は、姉妹のような関係で、そばにいてだけで安心です。家庭料理とは風土の暮らしに生まれた純粹料理です。民藝は地球と人間の手をつなぐ純粹工芸です。おかげさまで、今では、身近にある物の意味を感じ、心地よさにつつまれ、たいそう幸せです。



渡邊格

タルマーリー 代表

私は鳥取県智頭町で、自然界から野生の菌を採取して発酵させる伝統製法で、パンとビールを作っている。一方で現代では、西洋で開発された純粋培養菌による発酵が一般的であり、確かに、菌や素材の動きを止めることで工業的な大量生産が可能になっている。し

かし私が職人として感じる伝統製法の魅力は、野生の菌と歩調を合わせて、素材の生命力を最大限引き出すために力を尽くすことだ。私はそれを「動的なモノづくり」と名付け、発酵によってこの地域ならではの表現ができることに、大きな喜びを感じている。私にとって民藝とは、自然界の生き活きとした躍動感と共に、その地域独特の動的な個性を引き出すモノづくりのことだと思っている。



© 錦川実花

Yoichi Ochiai

落合陽一

メディアアーティスト

民藝性について考えていた。研究者でメディアアート作家の自分における民藝とはなんだろう。柳宗悦が挙げた伝統性・他力性・地方性のようなものはデジタルテクノロジーと作家性の間の均衡にもみられるような気がする。「物化(Transformation of

Material Things)」をテーマに作品作りをする自分にとって、「無心の美」「自然の美」というのはデジタルが自然化し、デジタルテクノロジーが異物ではなく自然風景の一部と捉えられていく過程で我々が今後獲得していくものだと思う。プラットフォームに寄与するのではなく、詩的に作品を作っていくときの技術と芸術の交流点というものは、機械を使いながらも手仕事に近い領域のように感じながら、今日も作品を作っている。

Akiko Kikuchi



菊池亜希子

モデル

私の祖父は、風来坊のような人だった。ふらりといなくなり、お土産をぶらさげふらりと帰ってくる。実家にあったガラスの戸棚には、祖父が旅先で買ってきたあらゆるものが並ん

でいた。それはちょっといびつな器や、張り子の人形だったりするのだけど、そこに並ぶバラバラなものたちは、不思議とみんな仲良く寄り添って佇んでいた。“民藝”と聞くと、私はあのガラス棚を思い出す。そして気づけば私もまた、祖父と同じように旅をして、あらゆるものを連れ帰っている。そこにあるのは、きっと憧れだ。使うたび、ここではないどこかの匂いを感じ、同時に今ここにある暮らしを丸ごと抱きしめたい。私にとって民藝とは、生活への憧れなのだと思う。



Ryo Yamazaki

山崎亮

studio-L 代表

有名なデザイナーになりたいと望んでいた頃、誰も思いつかないようなアイデアを、真似できない方法で実現させようと躍起になっていた。コミュニティデザイナーとして地域住

民とともに活動するようになってからは、生活者が発想したアイデアを、仲間とともに実現させ、多くの人々が丁寧に真似してくれることを願うようになった。発想した人が有名である必要はないし、実現させた人が手柄を独占することもない。そんなプロジェクトこそが偉大なのだと教えてくれたのは、民藝の思想と実践である。

展覧会を見た後は特設ショップも見逃せない！
展覧会オリジナルグッズのほか、
民藝にまつわる幅広い商品を取り揃えます。
なかでも注目はD&DEPARTMENTとポップアップ・ストア！

*最新情報は展覧会公式サイトでご確認ください。

D&DEPARTMENT

デザイン活動家のナガオカケンメイさん率いるD&DEPARTMENTは、47都道府県に1か所ずつ拠点をつくりながら、物販・飲食・出版・観光などを通して、47の「個性」と「息の長い、その土地らしいデザイン」を見直し、全国に向けて紹介する活動を行っています。
その活動には、出版、流通、展示というメディアを三本の柱(「民藝の樹」)に、地域の人々を結び、協働した民藝運動と共通点が見いだせます。
本展の特設ショップにD&DEPARTMENTが参加。「これからの民藝」を提案します。



ナガオカケンメイ
デザイン活動家

新しい民藝感覚のロングライフデザインを。

私たちD&DEPARTMENTは、長く使い続けられる生活用品など「ロングライフデザイン」を紹介、販売する活動体として2000年に誕生しました。そこには「民藝運動」に共通する部分が多く、そして、地球環境を考えたサステナブルな思考とも近年、合致してきていると思っています。今回、ショップとして参加し、「新しい民藝感覚のロングライフデザイン」としてご紹介しています。

石川県
ロックグラス
花



一点一点、宙吹きで作られた、
カットが美しいグラス

岡山県
倉敷 ノットイング
椅子敷き



毛織物工場の残糸の有効活用
から生まれた椅子敷き

沖縄県
読谷村のやちむん
和皿O紋 5寸



薄く挽かれた器と独自の発想で
生まれる柄が特徴的なやちむん

ポップアップ・ストア

会期中、展覧会特設ショップ内にポップアップ・ストアを展開します！
全国の民藝を扱うショップから全4店舗が2週ごとに来店します。魅力的な1点に出会えるはずですよ。

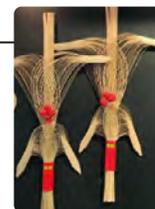


2021年10月26日(火)～11月7日(日)

諸国民藝 銀座たくみ

東京都中央区
<http://www.ginza-takumi.co.jp>

くらしの中に生きた手の技は、民族の生活文化そのものです。どこの国でも名もない職人たちが、風土に根ざした素晴らしい工芸品を生み出してきました。たくみでは日本を中心とした手仕事の中から、よい品を選んで皆様にお届けしています。



東京都
お神酒の口
お元(万年青)

真竹を使用した正月飾りのひとつ。新年にあたり、豊作の守り神でもある歳神様を家々に迎えて祀りますが、これは神棚のお神酒徳利にしてお供えし、新しい年の安寧を願うものです。その形や材質は地域によって様々。



2021年11月9日(火)～11月21日(日)

COCOROSTORE

鳥取県倉吉市
<http://cocorostore.com>

鳥取の自然環境から育まれた風土、伝統、手仕事は今なお、脈々と後世に受け継がれています。COCOROSTOREは山陰の自然と共に生きる作り手、素材や技術を紹介し、お店を続けていくことで生まれる繋がりを大切にしています。



鳥取県
お面PIN

「鳥取郷土お面PIN」は鳥取で製作されていた玩具工房(2014年廃業)の代表的な張り子面を革製のピンブローチにしたものです。青のハナタレやぬけ面、神話の因幡の白兔などに愛くるしい表情が特徴です。



2021年12月7日(火)～12月19日(日)

くらしのギャラリー本店

岡山県岡山市
<http://okayama-mingei.com>

昭和22年創業。以来、約70余年間民藝の頒布を生業としてきました。民藝は暮らしそのものごとと捉え、日々の生活が楽しく豊かになる「くらしの友いろいろ」をご紹介しています。



岡山県
椀

岡山県内在住の木地師が作る椀。漆器ではなく、木のうっわとして作ります。制作は一年をかけて、木取り・ロクロ・漆の工程を一人で手がけます。溜塗で仕上げられた椀は使うほどに美しい経年変化を遂げていく。普段使いの椀です。



2022年1月12日(水)～1月23日(日)

もやい工藝

神奈川県鎌倉市
<http://moyaikogei.jp>

日本には、その土地の自然と人の繋がりで生まれ、歴史や風土とともに育まれてきた手仕事があります。もやい工藝は、各地で今なお作られる優れた手仕事を、自らの眼で選び、紹介し、現代の暮らしに普及させていくことを信条としています。



沖縄県
読谷山焼
藍唐草文8寸皿

沖縄ならではの風土が感じられる、力強く大胆に描かれた唐草模様、ふっくらとした丸みを帯びた大らかな形。日々の食卓を明るく彩ってくれます。

開催概要

展覧会名 柳宗悦没後60年記念展「民藝の100年」
主催 東京国立近代美術館、NHK、NHKプロモーション、毎日新聞社
協賛 NISSHA
特別協力 日本民藝館

会期 2021年10月26日(火)～2022年2月13日(日)
開館時間 10:00～17:00(金・土曜日は20:00まで) *入館は閉館の30分前まで
休館日 月曜日(ただし1月10日は開館)、年末年始(12月28日～1月1日)、1月11日
 *ご来館前に美術館公式サイト等で開館時間や観覧料等の最新情報をご確認ください。

アクセス 東京メトロ東西線「竹橋駅」1b出口 徒歩3分
 〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園3-1

お問合せ 050-5541-8600[ハローダイヤル]

美術館公式サイト <https://www.momat.go.jp>

展覧会公式サイト <https://mingeil00.jp>

展覧会公式Instagram @mingeil00

<https://www.instagram.com/mingeil00>

展覧会公式サイト



展覧会公式Instagram



報道関係お問合せ先

柳宗悦没後60年記念展「民藝の100年」

広報事務局[株式会社ユース・プランニング センター内] 担当 和泉、大山、池袋

住所 〒150-8551 東京都渋谷区渋谷1-3-9 ヒューリック渋谷一丁目ビル3F

TEL 03-6826-8853 **FAX** 03-3499-0958

E-mail mingeil00@yppcr.com

Exhibition Title: 100 Years of Mingei: The Folk Crafts Movement

Period: Tue., October 26, 2021 – Sun., February 13, 2022

Hours: 10:00-17:00 (Fridays and Saturdays open until 20:00)

Admission until 30 minutes before closing.

Closed: Mondays (except January 10, 2022);

December 28, 2021 – January 1, 2022 and January 11

Access: A 3-minute walk from 1b exit, Takebashi station (T-08), Subway Tozai Line
3-1 Kitanomaru-koen, Chiyoda-ku, Tokyo 102-8322

100 YEARS OF 民藝の100年

柳宗悦没後60年記念展
民藝の100年

100 Years of Mingei:
The Folk Crafts Movement



MOMAT

東京国立近代美術館
The National Museum of Modern Art, Tokyo

2021
10.26 TUE
2022
2.13 SUN

ローカルであり、モダンである。